

“障害”を考える

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』(現・『紙つぶて』) 2007年4月9日

高校生になる娘が、春休みに、障害を持つ子どもたちのスキー合宿に、初めてのボランティアとして出かけた。そして宝物をもらったかのように生き生きと戻ってきた。

先天性四肢障害児父母の会という。生まれつき四肢のどこかに“障害”がある子どもと親の会である。25年も前、TVドキュメンタリーの取材の過程で知り合った。“障害”のかたちは本当にいろいろである。指や腕、脚の先が少なかったり、形が違っていたり、動かしづらかったり、乙武洋匡さんのような身体に知的障害が加わっていることもある。

自分の妊娠がわかり、そんな時だからこそむしろ撮りたくて、全国総会に特別参加した。大きなおなかでビデオを自分で回し、CS局の番組を作った。何らかの先天異常を持って生まれる子どもが、自然状態で3%前後はいることも知った。

私は娘が赤ん坊の時から、毎年このスキーに連れていくようになった。“障害”は、一人一人の「個性」である。こどもたちは、障害があるけれどがんばっている、のではなく、その子として懸命にがんばっているのだ。

それぞれの子どもと親の悩みや苦しみは、もちろんある。ただ私は何よりも、その場の持つ正直さと暖かさに魅かれた。娘も今年からは、自分がこれまでしてもらったように、ここでできた仲間とともに、参加した子どもたちの世話をする。

帰った翌日、愛知県知事の「(障害者は)弱い悪い遺伝子を持った人」発言があった。一緒に活動してみればいい。“障害”がある子どもたちがいかにパワフルで、私たちに元気をくれる存在であるか、よく分かる。